知の第二面（承前）

——個性的自覺としての美——

山田次郎

二

次に我々の考察しようとするのは生の、所謂知覺的內容である。云ひ換へれば感覺的性質の時間的並びに空間的なる——而も自然的に比較的獨立なる意味の具體性に於ける——複合である。

先づ色に關して我々の考察を始めよう。色も元來その直接の性質的存立態に於いては——差當り一切の內容がさうであるやうに——專ら時間的關係に於いて複數性を成す所のものである。例へば、赤と青との自然的に所謂「並存」なるものも、その質一層直接的には青に移るべく赤として、赤に移るべく青として、或は兩者の性質的綜合を顧慮しては、青勝ちなるそれに移るべく赤勝ちなるそれとして、赤勝ちなるそれに移るべく青勝ちなるそれとして、更には他の何らかの新たなる性質的統一態に移るべく、赤と青との性質的綜合そのものとして等、差當り皆夫々性質的單一的に、時間的な一段階を成すものに外ならない。併しながらこのやうな時間的直接態は云ふまでもなく尙極めて不安定なものであり、作爲的乃至技巧的にのみ捉へらるべく、自然的な所謂具體性をそなへて居らぬ。唯、その時間的關係の中には、眼筋其の他の身體部分に歸せられる所謂運動感覺的性質の或る相關的共存があり、この性質的時間的相關態が色の或るものの端的な感覺的現前に卽して、意味的に——相殺的乃至附加的手續に於いて（「有と知」參照）——組織せられつつそこ（感覺的性質的存在）に代表せられる時、始めてその色の——差當り單に性質的たるに止る現前態についての——かの空間性といふものの成立があるのである（例へば試みに一つの色の安定的な空間的存立が、具體的にいかに複雜な性質的時間的生動搖の意味的「消去」を含むかを內省せよ——色の空間的規定を——恰も存在

的に根源的所與的であるかの如くに考へて、例へば、その並立的領域性の如きをば、いかにかして――生理學的心理學的に一種の存在的機械的法則性に於いて――說明しようとする如き試みについては、必ずや先づ眞の根本的經驗としての、專ら性質的に時間的なる右の直接態が熟視せられることにより、その立場の一種の倒錯が氣附かれなければならないものと思はれる――併しそれは今、我々の當面の問題ではない)。而も色は元來或る空間的距離に於ける觸覺的體驗の豫示としての、視覺といふもののもつ生物學的機能に應じて、それがともかくも空間的規定を得る所に、始めて所謂知覺的なその一應の安定乃至一應の具體性を得る所のものである。

さて、色の世界が原始の時間的異質態の動搖と交錯を脫して――嚴密にはそれに卽しつつ――空間的な一應の安靜と劃定に到達する所に、領域的に區別された擴がれる色の間の關係として先づ境界といふものがあり、それによつて同時に形といふものが成り立つ。色は知覺的には互に他の色との接觸に於いて形を成す所のものである。而して、色のかやうな接觸や形は、差當りその知覺的段階に於いて單にそれら自身として――云ひ換へれば、一層具體的には不可分なるべき他の諸契機を暫く度外視しつつ――夫々かの「觀じ感ずる」一知の內容となることが出來るのであつて、我々の當面の考察の對象はここにあるのである。

先づ色の接觸について云ふならば、凡そいかなる色と色との並存もその並存によつて云はば釀し出される所の――云ひ換へれば、要素的なる色夫々の比較的な獨立性に卽する感情の多方向性、並びにその相互影響的拮抗的共存（內向合一）の事態に於いて、生起し來る所の――何らかの性質的統一（個性）の感受が、所謂感じのありの印象の纏まる意味に於いて成り立つ限り、その事に卽してそのいづれもが夫々獨自の美を成すのであつて、普通に所謂不調和として斥けられる如き配合の場合、實はそこにも却つて所謂「破調」的に一種奇辣な美が支配すると云はなければならないのである。

但しその際、一應そのやうにいづれもがひとしく美を成すと云へる中に就いて、例へばかの色調圖上互に對角線的に位する色同志の間に特に顯著な所謂調和の云はれる場合の如く、並存する色夫々の感情的方向が恰もその間に全き均衡を保ち得る如くに拮抗的であつて、そこに「知線」の「直角的」保持が云はば對象的に（客觀の側から）支持されてゐるといふべき場合にあつては、おのづ

からそこなる個性知的綜合統一が比較的に云はば自生的であり容易且迅速であるといふ事情に基いて（感覚的快の契機の協働のことを暫く措き）、そこに美の比較的な直接性が存するといふ類の、場合によつての若干の差違は勿論考へられるのである。

從つて又、右の個性知的綜合統一の成立に常つて、そこなる拮抗的諸契機の多を成す一面が色の十分な飽和度に於いて特に顯著に表面的であり、之に對してそこに共通的に同一性を成す契機の一面が——飽和度や明度の相等性として——比較的に背後に退く時、かやうな個性知的統一に卽する美は比較的強力に生々しく云はば原始的であるのに反し、そこに拮抗的に多をなす一面を通ずる同一性契機が、例へば比較的小なる飽和度に於ける共通的混入要素として、若しくは所謂「ボカシ」の連續的推移に於ける共通的段階として（尙、金色銀色の共通的な「鏤め」の場合も考へられるであらう）、ともかくも比較的に表面化する場合、そこに成り立つ個性知的統一の美は比較的穩かにして軟かく云はば一層洗練されてあるといはるべきが如きも亦、美の成立の——所謂個性知的統一一般としての——根本的規定に對する單なる二次的（變樣的）規定であるに過ぎないのである。

之を要するに、原理的に云つて美の肯定はあくまでものの個性知と卽する自己合致（絕對性）意識にありながら、そこなる一と多との相卽的二面に關して、例へば色の並存に飽和度や明度の同等性さへもが失はれる場合の如く同一性の一面が餘りに稀薄化するといふことの無い限りに於ける可及的に顯著な拮抗的相異性が存することにより、個性知的統一の成立がそこに單純な平板性を脱して立體的に構造的となればなる程、美のよろこびはおのづからその「振幅」に於いて得る所があり、而もそのやうな異多性の一面に關して、例へばかの對角線的に對立的なる色の並置の場合の如く、多的契機の特に均衡的なる拮抗に卽して所謂「知線」の動搖が云はば眞心的にもの——この場合、色の並置——の中央に、その「直角的」な落着きを得るといふべき場合には、そこに美の——この場合、所謂調和としての——比較的な直接性があるのに對し、例へば色の並置が青と青綠、或は青綠と綠のそれである場合に於いては、そこなる同一性契機の著しい表面化に卽する異多的拮抗性の餘りの薄弱、從つて又美のよろこびのおのづからなる低調（青的乃至綠的統一に卽する快の契機を別として）に加へて、そこに異多的對立の均衡が失はれてゐることにより、動搖する「知

線」は動々もすれば一方的に飽和的「理想」（性質的「本質」の所在）としての青若しくは綠に向つて「斜行」しようとしつつ（この事は更に、かやうな色の並置そのものの色彩圖金體を背景とする或る偏局の意識に卽しても亦、同樣に行はれようとし）、その「直角的」保持を條件とする美の成立に關して當然そこに自然的な對象的自發性が缺け（素朴に所謂不調和の感じ）、却つて主觀の側に於ける或る努力が必要とせられるのであつて、「知線」のこの自然的外逸傾向に逆ひ、若しくは、その外逸傾向に卽して、そのままそれを更に內面化する一層高次の立場に立ち（缺如意識そのものの積極的內容化）、かくてともかくも「知線」をあくまでものに「直角的」に對當せしめる（意識の「漠へ」）といふこの一種の緊張乃至努力に卽して、當然その美的肯定は自然的なる或る雜濁と遲延――云ひ換へれば、自然的に一應の美的否定、若しくは、その美的肯定に要する比較的に高い趣味的見地を伴はざるを得ないのである。

色の接觸乃至並存に於ける美、就中調和不調和の問題をかやうにそこに並置される色の「知線」に關する極性――云ひ換へれば、「知線」の外逸に對する「括弧」的性能――の大小といふべきものから說明しようとする我々の立場は又、かの白――或る場合、金箔銀箔の輝き――若しくは黑が他の諸々の飽和色を並存の相手としての比較的な公正さ（何れの色とも比較的によく調和し、よく相手を生かすといふ性格）の普通によく知られてゐる事實をも――色の「圓錐」乃至「四角錐」の想起に於いて――極めて明快に說明するが、これは色の取り合せに關する他の諸々の變樣的事實と共に上來の所述の簡單な應用であるに過ぎないのであつて、茲に改めてそれを詳述する必要はもはや存しないと思はれるのである。

それならば次に色が他の色との接觸に於いて成す、かの形といふものの感受知についてはいかに考へられるか。

この場合に於いても實は右に述べられた事情は形式的にあくまでやはりそのままに適用されるのであるに過ぎない。卽ち、形といふものの知覺的直接態――云ひ換へれば、旣に或る意味的含蓄に於いての就中視覺的なる現前（存在）態――の構成諸契機に互り、對象的本然に從うて偏頗無き凝視に卽してそれら諸契機のおのづから生の場に招來し、且相互に影響せしめ合ふ所の想像的生內容（そこに「本能的感入」要素と經驗的聯想要素との差は、單に程度上のものであるに過ぎない）の多岐性と、

同時に左に拮抗的にそこに「盛り上げ」られ「溝へ」られる意味の合一性とが――所謂感じのあり印象の纏まる意味に於いて――何らかの個性知的統一に到達し、かやうな個性知的統一に卽する所謂主語述語的「箝合」の自己合致感乃至自己逢着感が成り立つ所に、凡そ形といふものにとつての美の存立はあるのであり、その限りに於いて一應ありとあらゆる形が皆夫々獨自に「面白く」「趣がある」ことを否定し難いのであつて、例へば、普通に何の取柄もなく不規則に折れたに過ぎない線の或る長短でさへ、或る場合、枯れ果てた華への連想（想像的外逸と卽する感情的內歸）に於いてか、ともかくも生の敗殘といふべきものを象徵し得ないこともないと云はねばならぬのである。

唯、一應そのやうに何らか個性的な印象の凝結ある限り、皆夫々獨自に美をもつと云はなければならない中に就いて、例へば、點は餘りに單純に自己が自己と重なつて、云ひ換へれば、そこに同一性の一面のみ餘りに壓倒的であつておのづから美感が比較的に稀薄であるのに對し、既に圓に於いては「知線」の異多的彷徨が或る領域に亙りつつ、而も同時に方向的に均等な集約の同一性に於いてあるといふ事情に基いて、ともかくも多岐卽合一の構造性を含むに應ずる比較的深刻な美感が伴ひ、而も之を例へば隋圓に較べては却つてそこに同一性契機の比較的表面的なるに依る美の比較的な單純さと、同時に個性知的統一が「知線」の外逸傾向の不均衡無きため比較的容易であるといふ事情に應ずる、美の比較的な直接さ（眼につき易さ）があるといふことになるのである。

同樣に又茲に例へば一本の水平線分について、それが左右に方向的均衡を保つ所おのづから比較的に直接的な美が成り立つと共に、既に述の如きものに比しては明らかに異多的拮抗を含みつつ一層複雜に構造的でありながら、尙比較的に單純な平板性を脫しない自己合致の美の比較的な低調が感ぜられるのに對して、その線分が例へば垂直に立ち直る場合、既に上下の二方向に關して生の想像的感情的傾動が均衡を失つて居り、おのづから美の比較的な間接性（意識への遠さ、訴への遲延）と共に、或る複雜さ乃至深刻さをそこに加へることになるのであり、而もこの垂直線分を例へばそれを一邊とする正方形と比べる時、後者に於いては上下二方向の不均衡が却つて比較的に緩和せられる爲、美の直接性の或る回復がそこに感ぜられ、反面「知線」の相異的彷徨が領域を擴大する所おのづから美の「幅」にも或る增大が認められる

のであり、その正方形を更に矩形と比較する場合、後者に於いてはそこに方向的不均衡の加はるに從つて美の直接さは當然次第に失はれてゆきながら、同時に美の「甘さ」も亦減退し、相異性契機がやがて餘りの壓倒的優勢を占めるに至つては却つて個性知的統一の或る難澁が美の特異性强調の果て、自然的な美的否定意識の表面化を招來することとならざるを得ないのである。かくてかの古來有名な「黃金分割」といふ如きものも、一方に於いて全き等邊性の單調を破るべく相異性契機を一應明確ならしめつつ而も他方に於いてその相異性の一面を餘りに壓倒的ならしめることなく、かくて一方美の直接さについて失ふ所と他方美の複雜さ（特異さ乃至深刻さ）に於いて得る所との云はば差引合計が、自然的趣味に對する美にとつて比較的に最も貢獻的であるあたりの邊の長さの比率に外ならないといふ風に考へられるのである。

尙茲に一言附け加へるならば、先きに點の美と圓の美とについて一應前者の比較的な直接さと單純さ――從つて綜合的に結局後者の自然的な一層の美しさ――が考へられたのであるが、實はその反面、點についてはそこに無限的な一切を他とする意味に於ける「知線」の虛空放射といふべき事態が存在することに卽して、形式的に一種悲壯乃至崇高なる孤獨感といふべきものが意識せられるのに反し、圓については寧ろ「知線」の還歸的一面が自己的領域の獲得によつて一層勢力を回復する所、どの種の美感に關しては却つて比較的に減殺を免れないといふ事情が考へられるのである。元來、最深義に於ける美の感じは、窮極に於いて個の意識と卽する全體の絕對意識としての所謂無限感に外ならないのであり、從つてかの崇高の意識なるものも實はあらゆる眞の美の反面に本來的に卽してゐるべき筈のものなのであつて、唯その間、個性に徧する「知線」の集約に卽する擴散の反面が、場合によつて自然的意識に對する比較的な直接化（表面化）の便宜をもつか否かの差があるに過ぎないのである。かくて例へば、かの拋物線や雙曲線について云つてみても、そこに「知線」の個性知的結集がそれの或る無限的開放と不可分であることが――この場合特に客觀的事態の直接の支持に於いて――圓や楕圓に比し一層陽はであるといふ事情に基き、一箇の形としてのそれの美に既に一種の崇高感が比較的顯著であることを否定し難いのであり、更にかの「數學的崇高」といふ如きものの特に形の「大いさ」について云はれるといふことも、畢竟その「大いさ」に沿うて「知線」の無限的虛空への放射が、云はば

惰性的に導き出されつつ意識に表面化して來るといふ――――美のこの一面に關する限り比較的有利な――事情がそこに存在するといふことに外ならないと考へられるのである。

色に關する如上の考察に準じて、次に音に關しては如何に考へられるか。音について先づ考へられることは、それが音そのものとしては、專ら時間的關係に於いて立つといふことである。卽ち、その物的源泉についての漠然たる方向感を別として、音そのものとしてはそれはあくまで同時的か異時的かの關係に於いて立つのであつて、それの空間的並立といふことは考へられないのである。勿論、色も色そのものとして純感覺的（性質的）には差當り專ら時間的關係に於いて立ち、その原始的時間態が行動的體驗との相關に基く或る意味的組織を得る所に、始めてそれの空間的規定が――結局やはりその刺戟源泉に關して――成り立つてゐるのであるには相違ない。併しながら、色の場合に於いては上にも述べた如く視覺のもつ生物學的意義と關聯して、それの空間性との極めて緊密な關係が、元來意味的成立をもつ所のものたる空間性に恰も色そのものに卽するものであるかの如き經驗的直接性（存在的性格）を付與してゐるのに反して、音の場合にあつては、同樣に意味的成立をもつ空間的規定と音の音としての明確な知覺的（複合的）存立とが、比較的關係疎にして可分離的なのである。云ひ換へるならば、色と色との間の時間的關係は、特殊の場合を除いて、自然的に明確な知覺性をもつてゐないばかりか、その特殊の場合に於いてさへ、既にそれは明らかに空間性をもつた上での時間性であるのに反して、音の世界については、時間的關係こそ寧ろそれに本來的といふべく、その時間的世界そのものの自然的に明確な知覺的獨立（具體的存立）が經驗し得られるのである。

而して音がかやうに本來時間的であるといふことは、畢竟それが比較的に主觀的であるといふこと、云ひ換へれば、それが比較的に直（接）感（受）的であるといふことである。而も又、音（聽覺）は既に或る人が極めて適確にそれを「夜の感覺」と云つたやうに、差當り視覺的に現前してゐない事象の存立を告知する――云ひ換へれば、やがて視覺的、更には觸覺的に現前すべきものに關して、その未分明性に卽して警告を與へる――ことを以て、その本來の――「生命」的自己保存に關する――機能としてゐるものであり、當然感情的に――特に緊張

弛緩の方向に關して――挑發性が比較的强力であるといふ特性をもつ。卽ち、これらの事情こそ取りも直さず音のもつ特殊の美的意義を說明すべきものに外ならないのである（「色の音樂」の困難）。

ところで音は周知の如く、調音と噪音とに區別せられる。而して、自然的經驗的な意味に於いて前者を一層「美しい」としなければならぬが、これは何を意味するのであるか。蓋しそれは畢竟次の事柄を意味するに過ぎない。卽ち、調音が感覺的に直接的な一種の快を伴ひつつ――若しその快をそのまま美として說明せんか、そこには美の意義の著しい狹隘の外、感覺的に實的單一態を成す音の存立に卽して直ちに音波の時間的數的構造に關する或る形式性の意識を考へるといふ如き一種の牽强が不可避となるのであつて――その一種の快がおのづからそこなる內的瀉視（「知線」）を自己の所在に集中せしめ、本來の美感がそれに於いて成り立つ所の「知線の淸へ」なる個性知（感受）的統一が、當然その音に關して自然的に比較的直接的であるといふことに外ならない。若し本來の美意識に關して公平に云ふとすれば、やはり噪音にもあくまで噪音に獨自の所謂「感じ」があり「趣」があることを否定し難いと云はなければならないのである。

さてかやうなものとしての音の所謂知覺的複合に於ける時間的關係については、先づ音が二つ以上同時に存在する場合、その間に互の調和（「和音」）の問題があり、次にそれらが異時的關係に於いて立つ時、所謂「リズム」や旋律の問題があるのである。

先づ音の調和について云ふならば、旣に單一な所謂樂音の基音倍音的構成といふものがそれ自身その一つの場合として考へられるのである如く、關係音の振動數の比率が比較的簡單であることを以て條件とし、そこには或る共通的基本振動とそれの種々なる變樣乃至分化とが見出されるのを常とするのである。而して、差當り單に物理的である所のこの事態の心理的領域へのそのままの形式的移行に於ける一卽多的な形式性の意識といふものに於いて、それのもつ一種の美感が說明されるとなすのが普通の見解である。併し乍ら、そのやうにして一應理解される所のこの（音の調和的融合に關する）一種快的な美は、それをそのまま「美しさ」として認めることが――說明の上の多少の無理を別として――强ち不都合でないとしても、そこにおのづからこの種の（快的）美を以て卽ち音の同時的共存に關する限りの美であるとなす考へが潛む限り、それはもはや明白に誤謬であると云はな

ければならない。何故といふに、實は調和といふ如きものの破綻する所にこそ、却つて或る不快を含みつつも一種複雑な獨自の美が存在することを否定し難いからであつて（例へば、喘聲に喘聲の美が無いであらうか）、その意味に於いてはこの所謂「美しさ」なるものは、實は快の共存によつて導かれつつ當然自然的に一層直接的である所の美として、例へば快美といふ如き名により美一般としての美とは明確に區別しなければならない。それは要するに美の一樣態に過ぎないのである。

本來の美感一般はこの場合に於いてもあくまで事態の個性感でなければならない。即ち、音の共存が聽覺の分析的機能に應ずる相異的契機に關して、「知線」を一先づ多方面に散亂せしめる傾向をもちながら、而もその「知線」がともかくも全體としてそれの所謂「直角」態（「湛へ」）に綜合されるといふ事態に於いて、何らかの獨自の印象の纏まりなる性質的統一の絶對性（自己「箱合」）意識が成り立つ限り、到る處その意味の美は見出さるべきなのである。而もその間かやうな個性的自覺の具體的な成立の方式に關して、例へば音の調和が完全な「融合」に達した場合の如く、そこなる同一性の一面が餘りに優勢である場合には、個性知的統一の比較的な容易さと即する美の直接さと同時にその比較的な單純意味が免れ難く、之に反して異多的分化の一面が特に強調を得る場合、おのづから美の複雑化に即する深化の成り立つ反面に於いて、美の間接（否定含蓄）度の增す所却つて綜合的な自然的美的效能に於いて失ふ所あるを免れない（素朴に不調和の斥けられる所以）。即ち、かやうな事情の存することに於いて、既に述べられた美意識成立の形式的規定はそのまま茲にも適用されるのであり、かやうな一種の條件的交錯の形式的事情の中に、異多性の一面を成す音の諸要素が生への夫々の性質的影響に即してそのいづれにつき比較的に強調を得るかによつて、その間無數の質的相異が內容的に生じてくることになるのである。

同樣な事は又、音の繼起的複合についても云へるのである。即ち、音がいかなる時間的距離に於いて、又いかなる抑揚乃至揚抑の關係に於いて他の音に續くかに關する一種の知覺——云ひ換へれば、その繼起の體驗のそれ自身一箇の同時態を成すに對する內面的凝視——に就き、夫々性質的に特異な感情の消長が伴はれつつ、それらの複合に於ける感情的多方向の對抗的乃至助長的交互影響の上に、或る時間的範圍に亙る何らかの綜合的な性質的

統一が所謂印象の纏まりとして成り立つ限り、それらの音の一群に夫々獨自に異質的なる內容の美が存在するのであり、而もかやうな個性美の數限りなく可能なる中に就いて、感受的自覺に於ける同一性契機が――例へば間隔的乃至抑揚的關聯の比較的小なる範圍を單位としての反復に於いての如く――比較的顯著なる場合と、その反對に相異的に多をなす一面が――例へば繼起的關聯群の反復單位の擴大（要素の增加）、若しくは該單位間の感情的な形式的同等乃至連續的推移を破壞し了らない限りに於ける變樣（それは場合によつて美の强調ともなれば混濁ともなる）、更には、これら形式的事情の一層の高次元化（單位複合の單位化）に於いて、の如く――比較的に表面化する場合との、美の直接（淺薄）化と深刻（間接）化との兩側面が――綜合的に美の自然的衝擊の大小を結果すべく――いかなる均衡を保つかの事情に應じて相對的に美の所謂差等が成り立つて來るのである。併しながら、この差等なるものはあくまで唯、自然的な趣味の立場にとつて意味を成すものであるに過ぎず、眞に嚴正な意味に於ける直感の立場に關しては、個性知的統一を構成する異多的要素について、それが結局美の緊張であるか混濁であるか――云ひ換へれば、個性「彫出」の

徹底（深刻化）を成すか曖昧（淺薄化）を成すか、從つて生の全體へ響き渡る象徵性の强化か弱化か――を區別せられるといふことのある外、一旦成立した限りの美（個性「彫出」）は當然夫々の絕對性をもつべきであり、例へば夫々完成された單樂器的小曲の美と交響樂の美とについてその間の比較的な差等を論ずるといふことの愚は明白である。――秋の哀愁の眞の「彫出」は逆說的ながら春の歡喜をも含み得ると云つてよく（個の全體反映）、之に反して、生に一層廣く對應しようとする材料主義の徒らに尨大な濁混たるに過ぎない「交響樂」がいかに多いことであらう。

殘る所は、臭であり、味であり、廣義に於ける觸である。

これら三者を通じて、先づ考へられることは、それらが色や音の場合に比較して、生命の自己保持といふ事態に對する關係に於いて、一層切實であるといふことである。云ひ換へれば、それらの內容の感覺的現前は、色や音のそれに比較して、何らかの外界的事物の身體に對する一層の切迫、從つて又その取捨乃至追避に關する卽座的決定の態顏を意味して居り、この事はおのづからそれ

らの內容に對してかの快不快の感情を特に密接に結びつけつつ、畢竟そこに美的享受に關する一層の困難を伴はせてゐるのである。

かくて例へば嗅覺的內容の中、それがともかくも一種の美的享受の對象となる極めて稀な場合と考へられるかの「香」についても、そこには確かに快と不快との一種の均衡といふべきものが含まれてゐるかに思はれるのであるが、實はこの事は當然爾あるべきことであつて、少くもその意味に於ける或る程度の中性化、從つて意欲的取捨の立場からの自由といふことは總じてものの性質的統一に關する所謂個性知的凝視としての本來の美的見地が可能なるための不可缺の前提を成すものなのである。

同樣、之を味覺の場合について考へてみても、我々は茲には特に「美味」といふ言葉の著しい普遍的使用の習慣をもつのであるが、これは明らかに快と美との混同に基く「美」の字、或は國語「うまし」の兩義性を現はすものであり、食物に關して本來の味覺的乃至嗅覺的內容以外、尙視覺的要素を特に重要視して來た我が國傳來の一種の好もしい風習も亦、この場合その混同に少くも力を添へ、恐らく支那に於いてよりも著しい用語「美味」の普遍性を說明するものであるには相違なかるべく、要するに本來の味覺的內容そのものについては、直接的な快との混同を絕した嚴密な意味に於ける美の感じがそこに成り立ち難いことは明瞭であつて、それといふのも畢竟この種の感覺的內容が、臭の場合にも優つて不斷に快若しくは不快の感情を纏綿せしめ、當然その內容の眞の性質的本質に關する個性知的凝視が、それに必要な或る持續に關して不斷に攪亂せられるからに外ならないのである。

而してかやうに臭や味の感覺內容が、個性知的凝視乃至客觀化に關して不斷に妨害を受くる傾向にあるといふこと——卽ち一言にして、その比較的な主觀性といふもの（それが畢竟そこに告知せられる物の、身體的生命への比較的な切實さに裏附けられてゐることは上述の通りである）——とのおのづからなる關聯に於いて、これらの內容の所謂知覺的複合に關しても亦、そこに美の成立に關する著しい不利な條件として、それが色の如くには空間的並立の關係に立たないのみか、音の如くにともかくも一種の「かたち」を成すといふことがないといふ事實が見出されるのである。唯それらの內容の異質的な多に於ける混合や交代の時間的複合が、云つてみれば或る豐かな生の遂行として、例へば「饗宴」といふ如きもの

に於ける一箇の比較的に客觀的な表象性と印象的統一とに達し得る場合、そこにともかくも一種の美が成り立つことは考へられるのであるけれども、この場合實はそれらの內容の外尙幾多の重要な他の要素を含みつつ、既に單なる知覺の範圍を超えてゐるのであることは云ふまでもないのである。

廣義に於ける觸についても事情は概ね右と同樣である。卽ち、冷にせよ溫にせよ痛にせよ、狹義の觸としての所謂壓にせよ、これらは感覺內容としていづれも生にとつて餘りに實際的に緊急であり、直ちに快不快の感情を伴ひつつその比較的な身近さ――つまり主觀性――に於いて、意識をそこに「滿へる」意味の內的凝視に對しその對象となることが比較的に難いのである。のみならず――或は、從つて――その知覺的複合體に關しても亦、これらの內容は（狹義の觸を暫く措き）、時間的乃至空間的にそれらとしての別に纏まつた統一體の、比較的獨立に表象し得るものを形づくるといふことがなく、當然時間的構成の一卽多的な形式的事情に基く限りの美の意識も亦そこに成り立つことが不可能なのである。唯、その中に就いて、所謂狹義の觸に關してのみは――そこに視覺的勢力の壓倒たき場合に限り――比較的獨立の或る空間像の成立が考へられ、從つてそこにともかくも美的凝視の對象たり得るものの存立が考へられるのであり、更に所謂內部觸覺としての運動感覺を考へる時、このものに就いては或る場合――例へは舞踊に於いての如く――その時間的形式性に關し一種の美的享受の對象が成り立つことも考へられるが、思ふにこの場合、實は暗默の裡に視覺的客觀の共働がその不可缺の條件として含まれてゐるといふのが、常にその眞相ではなからうか。

之を要するに、生の知覺的段階に於いては、感覺的性質の凡そ五種に纏められるものの中、色と音との二者のみ特に重要であつて、之に比しては、臭味觸の三者は遙かにその後方に退かざるを得ないが、これは畢竟前二者がともかくも或る「距離」に於いて存立する事態の豫告であるのに對して、後三者は既に云はば事態の現實化であるといふ事情に相應するものであつて、そこに前二者の比較的な客觀性、卽ち反面に於ける後三者の比較的な主觀性の由つて來る所があり、當然個性知的な絕對性意識としての美意識も亦、後者について比較的にその乏しさを免れないのである。唯この場合それが快不快の直接的「實用」性からいかにかして――快不快の均衡乃至相

殺によるかの「實用」的擾亂への努力的な反抗によるか——自由を得、客觀的觀照卽感受への便宜を得る限りに於いて、そこに或る美的見地の可能が開け、——要するにものの性質的統一に關する意識の「湛へ」（「知線」の「直角」態）としての個性知的凝視の成り立つ所、そこに美があるといふ我々の上來の考へ方は茲にも依然その妥當性を失ふことがないのである。　（二、了）

前號目次

印度に於ける樂論……文學士　松尾義海
美的教育論としてのシラーの人間形成の理念……文學士　小田　武
知の第二面……文學士　山田次郎
—觀性的自覺としての美—
寸心先生日記抄（二）